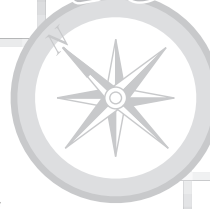


「北海道・北東北の縄文遺跡群」は来月、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界文化遺産登録から5周年を迎える。仙台など南東北の方々にはなじみが薄いかもかもしれない。紀元前1万3000年から同4000年にかけての17遺跡から成る。青森県には、日本最古の土器が出土した縄文時代草創期の大平山元（青森県外ヶ浜町）、津軽海峡を挟み前期から中期に繁栄した「田筒土器文化」の中心的存在「三内丸山（青森市）、華麗な文様と朱塗りの土器で知られる晩期の亀ヶ岡（つがる市）、是川（八戸市）など8遺跡がある。岩手県には6遺跡が所在する。

採集と漁労、狩猟をベースにした縄文の人々の暮らしは、コメづくりを基盤とした弥生の暮らしとは様相を異にしていたようだ。拠点となる遺跡は移り変わりながら、1万年以上にわたって基本的なライフスタイルが変わらず受け

# 座標



継がれていた。その時間が物語る「持続可能性」に驚かされる。

加えて、弘前大などの近年の研究によると、縄文文化から弥生文化への移行は、スイッチが切り替わるように進んだのではなく、縄文時代晩期の人々が独自の文化を維持しつつ、コメづくりとそれに付随する弥生文化を受容したらしい、という。つまり、北東北の縄文と弥生は「地続き」なのだ。

新たな縄文文化像が浮かび上がる中、世界遺産登録を契機に改めてその「持続可能性」を強く意識した。理由は、登録がコロナ禍の真ただ中だったことだ。世界中

## 持続可能性 人類の課題

「豊かな暮らし」を目指すうち、いつの間にか「当たり前」に、そして「正義」ともなっていたグローバルゼーション。感染症はあつという間に世界中へ広がり、人流や物流が滞って、経済も社会も根底から揺らいだ。

良くも悪くもその記憶が薄れつつある今、私たちは原油や石油製品の欠乏におびえている。中東の戦争によって石油輸入が制限された日本の姿は、堺屋太一が小説「断！」（1975年）に描いていた。その後の半世紀で備えが進んではいたが、石油に頼り切る足元の危うさは変わらない。「次の冬」を越す燃料を確保できるか。北国の人間として気がでない。

縄文時代が理想の時代だったとは思わない。特に気候環境が生活を大きく左右し、寒冷化に伴う人口減少も繰り返された。しかし、地球の裏側の資源に依存し、その地での戦禍に日常を左右される境遇は、少なくとも縄文の人々は想

青森大ソフトウエア  
情報学部教授

榎引 素夫

（青森市）

像もしなかっただろう。

時代を昭和へさかのぼるだけで、身の回りの「豊かさ」を確かめられる。私が物心ついた頃、卵は貴重品だった。毎日シャワーを浴びるようになったのは社会に出た後だ。「コンビニとスマホがない世界を想像できる？」という問いに学生たちは絶句する。今の暮らしを、私たちは手放せるか。

とはいえ、時計の針は戻らない。私の実家は三内丸山遺跡の近くにあり、子どもの頃は近くでよく土器を拾った。次の休日には、未来へのヒントを探しに、三内丸山遺跡へ出かけてみようか。

## 縄文から知る様相